牛込流江戸氏と牛込氏

矢島　有希彦

はじめに

近年、関東（特に東京地域）の地域史研究は、特に東京二三区内の自治体史の編纂や博物館における展示・研究活動の成果の蓄積によって、めざましい進展を遂げている。江戸氏についてみれば、『千代田区史』[1]、『江戸氏の研究』[2]、『大田区史』[3]などで行われた基礎的研究を更に押し進めている。近年では、渡辺智裕氏の喜多見流江戸氏文書の復元などの一連の研究[4]や、長谷川弘道氏の豊島郡における江戸氏も含めた熊野御師旦那株の売買・相伝関係についての研究[5]、豊島郡の郡域論という枠組の中で秩父平氏の一流として豊島氏と共に江戸氏全般について考察した『北区史』[6]、江戸郷・江戸城などを中心として江戸氏全体の動向について叙述した『新修千代田区史』[7]の刊行などにより、江戸氏の研究は深化・多様化している。

本稿で扱うのは、荏原郡牛込郷（現、新宿区）を拠点に活動した江戸氏で、牛込流江戸氏とよばれる一流である。この江戸氏に関する史料は、江戸氏の衰退後、牛込郷を所領とした牛込氏に継承され、牛込家文書の一部として伝来することとなった[8]。しかし、武蔵江戸氏の諸系図に一切見えない一流であるため、牛込流江戸氏を一通り検討した研究はほとんどない状態といってよい[9]。江戸氏研究が着々と進展している現状からすれば、庶流個々についての詳細な事例の検討は大きな意味を持つと思われる。そこで本稿では、牛込家文書を中心に、牛込流江戸氏について考察することを試みる。加えて、牛込流江戸氏の衰退後、この江戸氏の古文書を継承したという意味で、牛込氏の動向について触れ、両者の関係を見ていきたい。

一、牛込郷における江戸氏の展開

江戸氏と牛込郷の関わりが最初に確認されるのは、暦応三（一三四〇）年八月二三日、鎌倉公方足利義詮の意を受けた鎌倉府執事高師冬により、江戸近江権守が武蔵国崎西郡芋茎郷の替地として闕所地であった荏原郡牛込郷を預け置かれたことである。[10] この江戸氏は、明確な系譜関係は定かではないが、武蔵江戸氏の庶流と思われる。また、牛込赤城明神の大般若経の奥書（これについては後述する）や本土寺の過去帳から、武蔵江戸氏の庶流である江戸蒲田氏との関わりの可能性を指摘する説もある。[11]

江戸近江権守が牛込郷を預け置かれた暦応三年は、関東に南北朝内乱が飛び火している最中であった。暦応元（一三三八）年九月に常陸国に下向した北畠親房率いる南朝方と、鎌倉公方足利義詮・鎌倉府執事高師冬の北朝方が常陸国において戦闘状態を繰り返しており、武蔵国など近隣諸国に足利方より軍勢催促がなされていた。豊島氏や武蔵江戸氏は足利方として活動してたが、[12] 牛込流江戸氏については、着到状など参陣したことを示す史料は残っていない。しかし、この時期に足利義詮から所領を宛行われているので、牛込流江戸氏が足利方として活動していたことになる。

その後牛込流江戸氏が確認されるのは、八〇年近く後の応永三〇（一四二三）年一一月二一日のことである。江戸大炊助憲重が本領である豊島郡桜田郷（現、千代田区霞ヶ関付近）の沽却地の打ち渡しを前遠江守有秀・江戸上野入道より受けている。[13] この文書が出された背景に、応永二三（一四一六）年、前関東管領上杉禅秀が鎌倉公方足利持氏・関東管領上杉憲基に反旗を翻した上杉禅秀の乱がある。一時期は禅秀が鎌倉を占拠し、持氏が鎌倉から追われるという事態にまで発展したこの争いは、関東全域の武家をも巻き込んだ。武蔵江戸氏は豊島氏や南一揆と並んで持氏方の主力として活動しており、乱後には江戸・豊島氏は、「忠節之人々」の筆頭として所領を宛行われたという。[14] 憲重へ桜田郷の沽却地が返還されたのは、この乱に持氏方として参戦し、戦功を挙げた結果であろう。[15] 禅秀の乱に関連するものとして、次の史料がある。

史料1　足利持氏御判御教書写

於甲州田原陣、致忠節之由、
刑部少輔持家所注申也、尤以
神妙、弥可励戦功之状、如件
応永卅三年八月十一日　（花押）
江戸大炊助殿

史苑（第五九巻二号）

これは、応永三三年の甲斐守護武田信長と鎌倉公方足利持氏の合戦に関するものである。上杉禅秀の乱勃発以来、甲斐国では禅秀方についた守護武田氏と持氏方の逸見氏の対立が続き、この年、武田信長は逸見有直を攻めて追放した。これに対して一色持家を大将とする持氏方は、六月には都留郡に着陣、八月二五日には信長を降伏させている。[16] 憲重は持家軍に参陣し、甲州田原陣（現、山梨県都留郡）での戦功を持氏より賞せられている。[17] この時の持氏方は鎌倉府奉公衆が動員されていることから、[18] 憲重は禅秀の乱以後、鎌倉府の奉公衆として取り立てられたと思われる。なお、憲重は近江権守との関係ははっきりしないが、その一族と考えられる。

二、憲重以後の牛込流江戸氏について

鎌倉府奉公衆として活動した憲重は、所領の牛込郷などでの活動ぶりはどうであったか。文安六（一四四九）年五月一五日、憲重は次の文書を作成している。[19]

史料2　江戸憲重譲状

譲渡、
右　憲重地（ママ）行分、悉雖譲与重方仁、
非未来人歟、桜田地（ママ）行分之内代
五貫文・牛込郷之内代五貫文
譲与申處実也、此外手作等
之事者、可進重方者也、仍譲状
如件
文安六年五月十五日　憲重（花押）

憲重が、桜田郷・牛込郷内の所領の一部、及び手作分を重方に譲る旨が記されている。この文書の筆跡は花押も含めて非常に弱いので、あるいは憲重の晩年に書かれた可能性もある。この重方は、憲重の子息と推定される。ただし、本史料だけでは憲重が重方に家督や本領を譲ったという解釈はできないことや、既に黒田基樹氏が指摘しているように、憲重の本領が牛込郷である確証がないこと、重方の本領が牛込郷と見られること（これについては後述[20]）から見て、嫡子であるとは言い切れない。憲重の本領はむしろ桜田郷と考えられるので、その本領を引き継ぐ存在がいる可能性も想定する必要がある。

この時期の牛込流江戸氏の活動についての手がかりとして、文安元（一四四四）年に牛込赤城大明神に奉納された大般若波羅密多経六百巻がある[21]。この赤城大明神は、大般若経に「荏原郡牛込郷総社赤城大明神」[22]と見え、中世において牛込郷の総鎮守であった。かつて神楽坂にあった牛頭山千手院行元寺（移転して、現在は品川区西大崎にある）の鎮守社であったともいわれている[23]。明治初年の神仏分離令によって赤城神社と改名しており、同社の伝承では、正安二（一三〇〇）年に早稲田田嶋の森（現、新宿区早稲田鶴巻町）に祀られ、寛正元（一四六〇）年、太田道灌によって牛込郷に勧請され、弘治元（一五五五）年には牛込氏によって新宿区赤城元町に移され、現在に到っているという[24]。奉納された大般若経は、赤城神社には伝来していないうえ、わずかに一二巻が確認されているに過ぎない[25]。しかし、その奥書には牛込流江戸氏と赤城神社の関係を示すものがいくつかある。

特に「旦那讃岐守入道妙讃」（第一九七巻）、「旦那松原妙讃」（第三五〇巻）、「大旦那平朝臣重方、且之諸旦那等」（巻不明）は注目すべきものである。このうち、松原妙讃（讃岐守入道妙讃）については三説がある。「松原妙讃」ではなく「杉原妙讃」と読み、「本土寺過去帳」に見える江戸蒲田氏の重臣杉原氏の一族とする門真義芳氏の説[26]、牛込近辺の土豪で、赤城大明神が寛正元年に太田道灌によって移されたという由緒から、太田氏と関係の深い立場の存在という可能性を示した柴辻俊六氏の説[27]、大般若経寄進の大旦那として見える平朝臣重方を江戸重方と解釈し、重方の有力被官であったとする黒田基樹氏の説[28]の三説である。このうち門真説は、従来「松原」と読解されていた文字を「杉原」と読んでいるが、やはりこれは「松原」と読むのが適当だと考える[29]。柴辻氏の説は、太田氏が赤城神社を移したというのはあくまで伝承レベルの話であり、文安元年では江戸城もまだ築城されていない状況なので、牛込郷に太田氏の影響力があるという可能性は低いと思われる。また、大般若経寄進の旦那が松原妙讃、大旦那が平朝臣重方という両者の関係も説明がつかない。

大旦那の名が重方であること、そして江戸重方の名が見える史料2が文安六年、大般若経の奉納が文安元年と年代的にほぼ同時期であることから考えて、両者が同一人物である可能性は高い。また、牛込流江戸氏は武蔵江戸氏の庶流であると思われること、武蔵江戸氏が桓武平氏系板東平氏の一流であることからすれば、重方が平朝臣重方と平姓を名乗ってもおかしくはない。そして何よりも、当時牛込郷の総鎮守に大旦那として六百巻に及ぶ大般若経を奉納できた有力者となれば、江戸氏ということになろう。大旦那

平朝臣重方は、江戸重方と考えて間違いない。

では松原妙讃はどうか。松原氏については手がかりはないが、やはり旦那として大旦那江戸重方の下で大般若経を奉納したことを考えると、重方と妙讃を無関係とすることは難しい。黒田氏が指摘するように、妙讃は重方の被官、それもかなり有力な存在であった可能性は高い。この赤城大明神へ大般若経の奉納から、少なくとも重方の段階では牛込郷は牛込流江戸氏の本領となっていたと思われる。江戸氏が牛込郷を本領とするという意味では、重方が一つの画期と言えよう。[30]

重方ののち、牛込流江戸氏として見えるのは江戸越後守である。足利成氏より酒樽などを贈られた礼状を受けている。[31] この文書は年未詳だが、花押の判形から享徳・康正年間（一四五二～一四五七）のものと推定されるので、[32] この越後守は重方の子息と思われる。この時期の関東の政治状況を見ると、享徳三（一四五四）年一二月に鎌倉公方足利成氏が、対立する関東管領上杉憲忠を殺したことをきっかけに、上杉方と持氏方の武力抗争が勃発、抗争は関東の武家勢力をも二分し、以後三〇年余にわたって続くことになった。いわゆる享徳の乱である。乱中、どちらに付いて戦うかで多くの武家勢力が没落・新興した。牛込流江戸氏は、この書状により乱の当初は成氏方であったと思われる。しかし、所領のある荏原郡・豊島郡ともに扇谷上杉氏の分国に編成され、江戸城には扇谷上杉氏の家宰である太田道灌が入部しており、郡内の武家勢力は上杉方に属すことで存続できた。[33] 牛込流江戸氏は乱終了後にも存在が確認されることから、[34] 途中から上杉方として太田氏の指揮下に入ったものと思われる。

この後、江戸越後守は足利政氏からも鯛を贈られた礼状を受けている。[35] 年未詳ながら、政氏の花押形から長享～明応年間（一四八七～一五〇一）のものと推定される。[36] 先述した成氏の書状から年代的に開きがあることから、この越後守は成氏の書状を受けた当人、もしくはその子息と思われる。牛込家文書に見える牛込流江戸氏は、これ以降は確認できなくなる。しかし、牛込流江戸氏に関係する手がかりは、中世において豊島郡を中心に盛んだった熊野信仰に関する史料の中に見える。以下、これについて述べることにする。

三、「牛米てんきう」をめぐって

中世において、武蔵江戸氏の熊野信仰が盛んであったことは、熊野御師による江戸氏旦那株の転売[37]などから知られるところである。複雑な旦那株の相伝関係に加え、旦那で

ある江戸氏に庶流が多く分立するという状況となり、御師達はこれに対応すべく江戸氏の名字書立を作成した。[38]

史料3　江戸名字書立

「名字」（外紙）　「武蔵国江戸書立廊之坊」（端裏書）

武蔵国江戸の惣領之流

六郷殿　　しほ屋とのの　　まつことの

中野殿　　あさかやとの　　いたくらとの

さくらたとの　　いしはまとの　　うしゝまとの

大とのの　　こうかたとの　　しはさきとの

うの木とのの　　けんとういん　　かねすきとの

こひなたとの

このほかそしおゝく御入候、

はらとのいつせき

かまたとのいつせき

応永廿七年五月九日

熊野那智大社の御師廊之坊が、旦那である武蔵江戸氏惣領の一族および庶流の名を書き立てている。ここに見える一族の多くは、「殿」付けで在所名を名乗っており、豊島郡・荏原郡に広く分布している。その地名を一覧にしたのが表1である。

東は入間川と隅田川の合流点より内海に面した牛島・阿佐谷から、柴崎、桜田、蒲田などの内海沿いを中心に、東京低地・武蔵野台地上に江戸氏の一族が広く分立していることがよくわかる。この時期の牛込流江戸氏は憲重の活動期にあたると思われる。[39] 牛込流江戸氏は史料3の「このほかそしおゝく御入候」の部分、すなわち庶子に当たるか、憲重の本領が桜田郷の可能性があることから、「さくらたとの」の一族という可能性が想定できよう。桜田郷と牛込郷は内海から神田川水系でつながっており、内海沿いの桜田郷から川伝いに台地上の牛込郷へと本領を移したのが、憲重・重方の時期の流れということになる。

このほかに江戸氏に関わる名字書立はもう一点存在する。年欠ながら一五世紀後半成立と考えられており、「としま名字之かき立」という端裏書を持っている。[40]

史苑（第五九巻二号）

表1　江戸名字書立に見える名字（地名）[41]

名字	郡名	現在地
六郷	荏原郡	大田区・川崎市
しほ屋（渋谷カ）	豊島郡	渋谷区
まつこ（丸子カ）	荏原郡	大田区下丸子・川崎市上丸子・中丸子
中野	多東郡	中野区
あさかや（阿佐谷）	豊島郡	台東区橋場・今戸付近
いたくら（飯倉カ）	豊島郡	港区麻布台
さくらた（桜田）	豊島郡	千代田区霞ヶ関
いしはま（石浜）	豊島郡	台東区橋場
うしゝま（牛島）	豊島郡	墨田区向島
大との	不明	不明
こうかた（国府方）	豊島郡	千代田区麹町
しはさき（柴崎）	豊島郡	千代田区大手町
うの木（鵜ノ木）	荏原郡	大田区鵜ノ木
けんとういん	不明	不明
かねすき（金杉）	豊島郡	台東区下谷
こひなた（小日向）	豊島郡	文京区小日向
はら（原）	荏原郡	大田区多摩川二丁目付近
かまた（蒲田）	荏原郡	大田区蒲田

史料4　豊島名字書立

（端裏書）「としま名字之かき立」

江戸　在所江戸
かと岡殿　北いゝ蔵殿
江戸　同
ちゝふのはたけ山　よこせ殿　南いゝ蔵殿
同
こちや川殿

としまにては
三河守　ねゝまひやうこ殿
いたはし　同　江戸
周防　弥次郎殿　こう方殿
同
ひやうこ殿　平つか
ふんこ殿
同在名　かね杉
をく殿　たくミ殿
牛米　在名
てんきう　あさかい次郎殿
在名、平河　在こひなた
ひやうこ　たんしやう殿
さはい所大ニて　まえた　今ハこかいちそく
今ハそふりやう　はやと
平六殿

かつまえ山ね　　在所平山
在所堂入　　平山殿
こみや殿　　かつま
むら山　　弾正殿
山口殿　　藤その
かつま　　さんなひ殿
大郎
おや
さ衛門殿
平山　　あたち大宮
浄賀殿　　牛小田殿
しらこ庄　　庄
賀伝助殿　　中務丞

端裏書の通りの意味であれば、豊島氏の一族の名字の書き立てということになるが、豊島氏の一族と見られるのは、豊島三河守・練馬兵庫・板橋周防・板橋弥次郎・平塚豊後のみとなる。史料3と比較すれば、北・南飯倉、国府方、金杉内匠、阿佐谷次郎、小日向弾正、大平六が江戸氏の一族と判断される。書立の前半こそ豊島・江戸氏の一族の記載であるが、後半は村山（山口殿）・平山（平山殿）などが多西郡と思われる上、豊島・江戸氏との関わりは確認できない。従ってこれは、豊島氏の一族の書立とは言い切れない。強いて言うならば、御師が自らの旦那について、豊島・江戸氏という秩父平氏を中心に、周辺の武家を交えてまとめたものということになろう。

史苑（第五九巻二号）

ここで注目したいのは、「牛米てんきう（典厩）」の存在である。「牛米」を「うしごめ」と読むならば、豊島・荏原郡の中世地名で該当するのは「牛込」と思われる。また、前後に小日向・金杉など江戸氏の一族が記名されていることを考えると、この牛米典厩も江戸氏の一族と見るのが妥当であろう。牛込の地は、この書立が作成されたと推定される一五世紀後半、牛込流江戸氏の本領となっているので、牛米典厩もその一族の可能性が高い。この時期、牛込流江戸氏としては、重方・越後守の名が見えるが、彼らが牛込の在所名や典厩と名乗ったことは確認されないことから、牛米典厩は彼らの子息、もしくは一族と思われる。

牛込流江戸氏は、越後守以降史料上に確認できなくなり、牛込郷からその姿を消してしまう。しかし、その末期には一族の中から在所名の牛込を名乗る存在が登場していたのである。牛込流江戸氏の後、牛込郷には牛込氏が登場する。これは、同じ牛込氏でも全く別の系譜を引いている。これは上野国大胡より移住したという伝えを持つ大胡氏が在所名を取って牛込姓を名乗ったものである。[42] 牛込流江戸氏と牛込氏の間には、血縁関係などについての確かな手がかりはない。しかし、牛込流江戸氏の一連の古文書は牛込家に

伝来したもので、戦国末期、牛込家における分家創出の際には江戸氏の文書も分割相続の対象になっていたと思われることから、[43]両者の間に何らかの関係を想定する必要がある。以下、最後に牛込氏の動向について見ていこう。

四、牛込氏について

牛込氏の初見は、大永六（一五二六）年十月一三日のことで、牛込流江戸氏の終見史料からおよそ二〇～四〇年ほど後のことになる。牛込助五郎（重行）が、北条氏綱より比々谷村（現、千代田区日比谷付近）の陣夫・小屋夫役を免除されている。[44]

ここでまず、牛込氏の戦国期の系譜を以下に示そう。[45]

重行（助五郎・宮内少輔）　勝行（宮内少輔・大胡平五郎カ）
　　勝重（彦次郎・三右衛門・宮内少輔）
　　平四郎

この牛込氏は上野国大胡の住人で、牛込移住は牛込重行が当主の時であったという。重行は大永四（一五二四）年の上杉朝興と北条氏綱の合戦においては扇谷上杉氏に従っていたが、氏綱の江戸城攻めで戦功があり、天文年間、北条氏康に従い牛込の地へ移住したと伝えられる。[46]しかし、初見史料から見て、牛込氏はこれ以前に北条氏から所領の安堵を受けているはずで、大永六年以前に牛込郷にいたことは確実である。北条氏に従った契機は牛込家の「系譜」にある通り、大永四年の江戸城攻略と思われるので、少なくとも大永四年には牛込氏は牛込郷に住していたことになる。また、扇谷上杉氏に従っていたものが北条氏についたとなれば、移住の時期は更に遡り得る。

この牛込氏は、現在の新宿区袋町の光照寺付近一帯に牛込城を構えていたといわれている。[47]ここから北東五〇〇メートル余りにある筑土八幡神社（新宿区筑土八幡町二―一）付近は、かつて江戸城主上杉朝興の塁（筑土塁）跡であったといわれ、[48]牛込城から北側、筑土塁から西側はかつて御殿山という通称で、ここに太田道灌が御殿山城と築いたとの伝えを持つ。[49]いずれも遺構そのものは確認されていないが、それぞれ武蔵野台地上の半島状の小台地上に位置し、北側に神田川の谷がある。牛込の地は、神田川沿いに鎌倉街道の中ノ道の支線が通っていたと思われ、[50]これらの城館跡はこの街道を見下ろす位置にあったことになる。

近年、牛込城跡とされる地域から北西わずか三〇〇メートルほど先、台地辺縁部に位置する筑土八幡町遺跡の発掘調査が行われ、中世の遺構が確認された。[51]一つは、井戸の

可能性があるものの遺構の性格は確定できなかったが、板碑片が検出されている。[52]紀年銘は「□正十六年丁丑□禅尼」とある。元号の最後に「正」を使用し、一六年続いたものは永正・天正だが、共に一六年では干支があわない。ただ、板碑は天正年間ともなるとあまりみられないため、干支から判断して永正一四（一五一七）年のものと判断されている。もう一つの遺構は井戸で、前述の遺構の一部を切る形で存在し、一五七〇～八〇年頃の作成と思われる美濃焼の擂鉢の破片、及び常滑系の大甕の破片が確認されている。調査地域からは、住居跡などは確認されていないが、これらの遺構・遺物からすれば、永正年間ごろから一六世紀末にかけてこの周辺に人々が生活し、周辺には中世遺跡があった可能性が高いことを示している。

牛込付近は、半島状の小台地の間に低地が入り組んだ谷戸地形であったため、台地の辺縁部にあるこの遺跡は、台地上・低地のいずれにも中世の人々が生活していた可能性を示す。ただ、周辺の台地上には、牛込城・筑土塁・御殿山城いずれも伝承のレベルを出ないものの、江戸城の支配が扇谷上杉氏から小田原北条氏に移る前後の時期に関わる城館跡が存在し、鎌倉街道の枝道や神田川を見下ろす交通の要衝ともいえる場所にあること、この遺跡が牛込城跡にほど近い場所にあることを考えると、これら城館跡と時期的に関連する可能性はあると思われる。あくまで仮説だが、牛込流江戸氏の終見史料の推定年代が遅くとも明応年間なので、牛込氏の牛込移住は、板碑の年代の前後、つまり永正末年まで遡れる可能性があるのではないか。

牛込氏は、重行が氏綱に従ってから、勝行、勝重・平四郎と三代にわたり小田原北条氏に従った。江戸衆として編成され、江戸城代遠山氏を指南とした。[53]牛込氏は、この江戸遠山氏とは密接な関係にあり、勝重の妻は遠山綱景の娘である。[54]勝行には嫡男勝重と平四郎の二人の子息がおり、このうち平四郎は分家として独立し、馬廻に編成されるようになった。[55]

所領について見ると、重行の段階では、史料上は比々谷村しか確認できないが、牛込を名乗っていることから、牛込郷も所領であったと思われる。『北条氏所領役帳』には、江戸衆に「大胡」が見え、牛込に六四貫四三〇文、比々谷本郷に六七貫七八〇文、葛西堀切に四五貫文の所領を有している。[56]この大胡は、時期的に見て牛込勝行のことを指すと推定される。大胡となっているのは、牛込という姓が、在所名であったからだと思われる。勝行が、天文二四（一五五五）年には本名を牛込に改称することを北条氏康より認められていることはそれをよく示している。[57]

勝行の所領は、嫡子勝重とその兄弟の彦四郎に分割相続

された。彦四郎は分家を起こしたと見られ、牛込のうち富塚（現、新宿区戸塚）、及び比々谷郷出夫銭六貫文分を受け継いだ。残りの所領と家督は勝重が継ぐこととなったのである。以上から、牛込氏の所領は、基本的には牛込郷・比々谷本郷（比々谷村とも見える）であったといえる。そして所領役帳に見る限り、牛込・日比谷ともほぼ同等の貫高であった。

これを牛込流江戸氏の所領を比べた場合、牛込郷については一致し、江戸氏の桜田郷と牛込氏の比々谷本郷に違いが見られる。しかし桜田・比々谷は地理的に極めて近接した場所に位置すると思われ、いずれも神田川を媒介に牛込郷とつながっている。また、比々谷本郷の名は、桜田郷より後になって確認されることや、両者とも広域地名であることからすると、両者が同じ場所であった可能性も否定できない。つまり牛込氏と牛込流江戸氏の所領は、非常に近い位置関係にあったと思われる。

おわりに

本稿では、牛込郷を拠点に活動した牛込流江戸氏と牛込氏の動向について考察してきた。ここで牛込流江戸氏の系譜関係について簡潔にまとめておこう。まず、牛込郷との関わりについてであるが、暦応年間に江戸近江権守が牛込郷を所領としたことが確認されるものの、その後に見える江戸憲重の段階までは、牛込郷を本領とする確証が得られなかった。憲重が上杉禅秀の乱の戦功として桜田郷の沽却地を返還されたことや、重方への所領譲り渡しの際に桜田の知行分については一部のみで、家督まで譲った証拠がないことなどから考えると、桜田郷が本領であった可能性を想定する必要があると思われる。また、江戸氏の名字書立に出てくる地名の分布の傾向からすれば、内海の湾岸沿いから内陸の台地上に向かって江戸氏一族の所領が展開していった、と見ることもできる。

重方についていえば、憲重から所領を譲与される以前に、牛込郷の総鎮守である赤城大明神に対して大般若経六〇〇巻を奉納する際の大旦那となっていることから、牛込郷を本領としていたと考えて間違いない。もし憲重が牛込郷を本領としたならば、大旦那は憲重だったはずである。このように考えた場合、重方は憲重の嫡子である可能性は低いのではないだろうか。黒田基樹氏が指摘するように、桜田郷の本領を受け継いだ嫡子が別に存在した可能性があると思われる。[58] その意味では、重方・越後守の系譜が、厳密な意味での牛込流江戸氏といえるのだろう。そして、牛米典厩もこの一流に含まれると考えたい。

この江戸氏は、従来牛込郷から桜田郷へ進出したと考えられがちであった。しかし憲重から重方への代替わりの問題からみれば逆であろう。また、重方の子息と思われる江戸越後守が足利政氏に上納しているのが鯛であること[59]は、牛込郷を本領としながらも、神田川を通じて桜田郷の眼前に広がる日比谷入江から内海につながっていたこと示唆すると思われる。上納品でいえば、牛込氏の段階には鯉・蛤となり[60]、神田川・日比谷入江とのつながりがより明瞭な形となって現れるのである。牛込流江戸氏にも、内海との関わりを念頭に置く必要があるだろう。この江戸氏は、一五世紀末から一六世紀初頭までには衰退していたと思われる。

一方牛込氏は、江戸氏衰退後まもなく牛込の地に登場する。遅くとも永正末期には、江戸城主上杉朝興方として牛込郷にいたと思われる。大永四年、北条氏綱が江戸城から上杉朝興を追ってからは、小田原北条氏に従い江戸衆に編成されたのである。所領は本領である牛込郷と比々谷本郷を基本とし、勝行の段階で葛西の堀切が加えられている。所領の位置が牛込流江戸氏と非常に近いこと、牛込氏初期の段階から比々谷が所領として見えていることから考えれば、牛込氏が江戸氏の所領を引き継いだと考えることができよう。また、江戸氏の文書を牛込氏が継承し、戦国期の分家輩出に際してその一部も分割相続の対象となっていることからすれば、牛込氏は江戸氏の家督を継承した可能性は高いと思われる。その意味で、牛込氏は牛込流江戸氏の継承者的存在といえるのである。

以上で拙い考察を終える。牛込流江戸氏・牛込氏ばかりを追いかけ、牛込流江戸氏を、荏原郡・豊島郡のなかでの江戸氏の一流としての位置づける視点が欠落してしまった。今後の課題としたい。

注

(1) 『千代田区史』上巻（千代田区役所、一九六〇年）
(2) 萩原龍夫編『江戸氏の研究』（名著出版、一九七七年）
(3) 『大田区史』上巻（大田区、一九八五年）
(4) 渡辺智裕「中世における喜多見流江戸文書復元について」（早稲田大学『文学研究科紀要（哲学・史学編）』別編二〇集、一九九四年）、同「江戸氏研究の成果と鎌倉期の江戸氏の婚姻関係について」（豊島区立郷土資料館研究紀要『生活と文化』第九号、一九九五年）
(5) 長谷川弘道「中世豊嶋郡域における熊野御師旦那株の動きについて」（『北区史研究』第一号、一九九二年）
(6) 『北区史』通史編中世（北区、一九九五年）
(7) 『新編千代田区史』通史編・通史資料編（千代田区、一九九八年）
(8) 牛込家文書所収については、矢島有希彦「牛込家文書の再検討」（『新宿歴史博物館研究紀要』第四号、新宿区教育委員会、

一九九八年）に写真版及び翻刻文を掲載している。本稿では、牛込家文書についてはすべてこれによった。

(9) 牛込流江戸氏について概観したものとして『新宿区史』（新宿区役所、一九五五年）が挙げられる。しかし、江戸氏の研究の蓄積が少ない時期のものだけに、他の江戸氏庶流と混同した叙述が目立ち、検討を要する。なお、『新宿区史』（新宿区、一九九八年）においても、江戸氏、牛込氏についての記述があるが、基本的に前出の『新宿区史』の内容を継承している。

(10) 暦応三年八月二三日　高師冬奉書（牛込家文書）

(11) 門真義芳「江戸蒲田氏の研究」（萩原龍夫編『江戸氏の研究』）

(12) 豊島氏については、暦応元年十一月十七日　豊島宗朝着到状、康永元年六月日　豊島重久着到状（共に豊島・宮城家文書、『豊島・宮城家文書』、豊島区教育委員会、一九八八年）。武蔵江戸氏については、古文書は残っていないが、『太平記』巻一六の武蔵野合戦などにその名が見える。

(13) 応永三〇年一一月二一日　前遠江守有秀打渡状（牛込家文書）

(14) 『鎌倉大草紙』巻之二（『北区史』資料編古代・中世二、北区、一九九四年）

(15) 応永三三年八月一一日　足利持氏御判御教書写（牛込家文書）

(16) 『勝山記』応永三三年項（『妙法寺記』富士吉田市教育委員会、一九九一年）。『鎌倉大草紙』

(17) 憲重は、七月二六日付けで一色持家より、田原在陣の功を持氏に注進する旨の書状も受けている（牛込家文書）。

(18) 『北区史』資料編古代中世一、一三五頁

(19) 文安六年五月一五日　江戸憲重譲状（牛込家文書）

(20) 『北区史』資料編古代中世一、No.131・137解説

(21) 大般若波羅密多経（以下、大般若経とする）については、『新宿区文化財総合調査報告書』（新宿区教育委員会、一九七六年）、及び門真義芳「江戸蒲田氏の研究」参照。『新宿区文化財総合報告書』は、写真版も掲載しているため、本稿ではこれを基本とし、収録されていないものについては「江戸蒲田氏の研究」を参考にした。なお、これらに所収されていないものとして、巻一四四・三六〇は大東急記念文庫所蔵。巻四四四は『古典籍下見展大入札会目録』（東京古典会、一九九八年十一月）に写真図版が掲載されている。

(22) 「大般若経」巻四六四奥書

(23) 『御府内寺社備考』二、（名著出版、一九八六年）行元寺の項。

(24) 磯部鎮雄「神楽坂界隈の社寺の変遷について」（『新宿区立図書館資料室紀要』四、一九七〇年）、『新宿区文化財総合調査報告書』二

(25) 現在確認できているのは、第一四四・一九七・三四八・三六〇・四四四・四六四・五一七巻、及び奥書のみが第六二・一一七・二七七・三五〇・四四二巻である。

(26) 門真義芳「江戸蒲田氏の研究」

(27) 『ガイドブック新宿区の文化財』（1）古文書（新宿区教育委員会、一九八一年）

(28) 『北区史』資料編古代中世一、No.131解題

(29) 『新宿区文化財総合報告書』掲載の写真版参照

(30) この江戸氏が重方の段階で本領を牛込郷としていることから、黒田基樹氏は牛込流江戸氏の称は重方以降に使うのが妥

当としている（『北区史』資料編古代中世一、No.137解説）。
(31) 年未詳　足利成氏書状（牛込家文書）
(32)『北区史』資料編古代中世一、No.250号解説
(33)『北区史』通史編中世、第三章第二節
(34) 年未詳　足利政氏書状写（牛込家文書）
(35) 年未詳　足利政氏書状写（牛込家文書）
(36)『北区史』資料編古代中世一、No.251解説
(37)『北区史』資料編古代中世一、No.28・64・73・84・93
(38) 応永二七年五月九日　江戸名字書立（『北区史』資料編古代中世一、No.104）
(39) 牛込郷内には中世成立の熊野神社は確認できないが、牛込郷の西、荏原郡柏木・角筈村の地に熊野十二社権現がある（現、新宿区西新宿二丁目）。ここは、紀州より移住し、中野郷を開発し中野長者と呼ばれた鈴木九郎が、応永年間に熊野から十二所権現を勧請したという伝えを持つ。熊野出身の鈴木氏では、品川湊の有徳人鈴木道胤の存在が知られており、江戸氏の一族に「中野殿」が存在し、牛込郷に牛込流江戸氏がいることを考えれば、牛込流江戸氏が熊野信仰に関わっていた可能性を想定する必要があろう。
(40) 豊島名字書立（『北区史』資料編古代中世一、No.212）
(41) 地名の比定については、『北区史』通史編中世、表2－6（西岡芳文氏作成）、『大田区史』上巻を参考にした。
(42)『寛政重修諸家譜』一四巻、牛込の項
(43) 矢島有希彦「牛込家文書の再検討」
(44) 大永六年十月一三日　北条氏綱朱印状写（牛込家文書）
(45) 矢島有希彦「牛込家文書の再検討」掲載の系図に加筆
(46)「系譜」（牛込家文書）。これは『寛政重修諸家譜』作成に伴い、牛込家が提出した系図の写と思われる。
(47)『江戸名所図絵』牛込城跡の項。『御府内備考』牛込之一、牛込城蹟の項。
(48)『江戸名所図絵』筑土八幡宮の項
(49)『御府内備考』牛込之一、御殿山の項
(50) 芳賀善次郎『旧鎌倉街道・探索の旅―中道編』（さきたま出版会、一九八一年）
(51)『筑土八幡町遺跡』（新宿区筑土八幡町遺跡調査団、一九九六年）
(52) この板碑は、青緑色をしているものの、材質は武蔵型板碑に使われる緑泥片岩ではなく角閃岩である。
(53) 黒田基樹「江戸城将遠山氏に関する考察」（同『戦国大名北条氏の領国支配』、岩田書院、一九九五年）
(54)「遠山系図写」（牛込家文書）。『寛政重修諸家譜』牛込の項。
(55) 天正十一年六月五日　北条家朱印状写（牛込家文書）
(56)『平塚市史』一　資料編古代中世（平塚市、一九八五年）
(57) 天文二四年正月六日　北条氏康判物（牛込家文書）
(58)『北区史』資料編古代中世一、No.137解説
(59) 一二月九日　足利政氏書状写（牛込家文書）
(60) 一一月一七日　北条氏綱書状写、正月十日　北条長綱書状写、二月三日　北条氏政書状写（牛込家文書）
（附記）本稿脱稿後、小川信「江戸氏牛込氏文書について」（『武蔵野の古文書』武蔵野市教育委員会、一九九八年一一月）が発表された。武蔵野市の文化財として、牛込家文書について詳細な解説がなされている。ご参照いただきたい。

（新宿歴史博物館博物館研究員）